

梅雨期における施設野菜の灰色かび病対策について

本年度は、6月に2つの台風の接近や梅雨前線の活動が活発なことから、平年に比べ降水量が多く日照時間も少なくなっています。そのため、施設栽培の果菜類において灰色かび病の発生が認められています。今後の気象条件によっては、被害の拡大が心配されます。灰色かび病の発生に注意し、速やかな防除に努めましょう。

1 主な被害作物 夏秋トマト、ピーマン

2 灰色かび病の多発条件

灰色かび病の発生好条件は、20℃前後の気温と多湿である。このため、夏秋栽培における果菜類では、梅雨時期の曇雨天により発病が助長される。

3 防除の考え方

- 1) 多湿により発生が助長するので、排水対策などを十分に行う。
- 2) 発病果や発病葉は伝染源となるので、見つけ次第ハウス外に持ち出し、土中に深く埋める等の処分を行う。
- 3) 密植を避け、適切な肥培管理で植物体が過繁茂にならないようにする。また、適度な整枝や葉かきを行い、通気をよくするとともに殺菌剤がかかりやすくする。
- 4) 薬剤散布は、発病前の予防散布を基本とするが、すでに発病が認められる圃場では、治療効果のある薬剤を散布した後、予防剤を中心としたローテーション散布へと移行するのが効果的である。
- 5) 防除薬剤は、大分県農林水産研究指導センターホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」(<http://www.jppn.ne.jp/oita/>)を参照する。
なお、薬剤によっては、指針の更新日以降に登録内容が変更されている場合があるため、薬剤のラベルに従って使用すること。

4 防除上注意すべき事項

- 1) 農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守し使用する。特に、混合剤の場合、異なる商品名で同一の薬剤成分が含まれる場合があるため、「成分総使用回数」を十分確認した上で使用する。
- 2) 薬剤によっては、高温時に葉害を生じやすいものがあるため、散布時間や天候、使用する展着剤の種類等に十分注意した上で散布を行う。